

## 優秀賞

「創造する・挑戦する」

―助け合い共に生きる世界を目指して―

愛知県立岡崎高等学校2年

副 島 明日香

マイナス10度。今日は寒くないと思っていたが、急な夕方の雨で手先がかじかんで動かなくなつた。ここは東欧チエコ極寒のプラハ。東洋人の子供の私がホームレスの人にサンドイッチを配るのは珍しいのだろうか、道行く人々が物珍しそうに見る。しかし、私は恥ずかしくない。彼に会うために、サンドイッチを配り続けた。

父の転勤でプラハに暮らす私と彼との出会いは、帰宅する人々で混み合った地下鉄の駅だった。不慣れた切符自動販売機で切符を買おうとした私は、お金を販売機の下に落としてしまった。列に並ぶ人々の苛立ちで、チエコ語が話せない私は動揺し焦るばかりだった。私の焦りがピークになった時、犬を連れた足の不自由なホームレスの人が近寄って来た。私の焦りがいきなり大きな不安に変わった。

美しい町並みとは対象に、プラハにはたくさんのおホームレスの人がいた。私はみすぼらしい格好、きつい体臭の彼らが

苦手で関わりを避け、いつも駅にすることも無く存在する彼らを軽蔑していた。

そのホームレスの彼に何かされるのかと怯えていると、彼は持っていた杖で落ちたお金をかき出し、私に手渡した。突然のホームレスの人との大接近で、緊張して私はお礼さえも言えなかった。切符を買って、改めて彼を探したが見当たらなかった。

混み合った駅の中、困った私に関心を持ち、助けてくれたのは、駅員でも列に並ぶ人々でも無く、駅の隅で存在を忘れられたようにいたホームレスの彼たったひとりだった。私が軽蔑し関わりを避けたホームレスの彼だけが、私に関心を持ち助けてくれた。私の落とした硬貨でも彼にとって必要なはずだったのに。

私は反省した。人を外見や概念で判断し、偏見と差別を持つていた自分を恥じた。

それから、私はチエコ語も勉強し、機会あれば駅で彼を探したが、なかなか会えなかった。寒さも極限になり諦めかけた12月のクリスマスに近い日曜日に、母が属するボランティア組織がホームレスの人にサンドイッチを配る事を知った。終日の大変な仕事のため子供は無理と断られたが、彼に会いたいその一念で、無理を言って参加させてもらった。

雨の中、場所を変えながら、サンドイッチを配った。彼に

はもう会えないかもと半分諦めかけた時、年配のホームレスに列の順番を譲っている彼に会えた。辛い生活の中でも助け合う彼を見てみると、胸が熱くなった。いよいよ、彼にサンドイッチを手渡す時が来た。緊張したが、彼の目をしっかりと見て、何度も練習したチェコ語でお礼を言った。彼は私を助けてくれたことは忘れていたようで、とても驚いていた。

「こちらこそ、ありがとう。僕のことを覚えていてくれて、探し出してくれて。嬉しいよ。君は聖ミクラスで、クリスマスプレゼントを僕に届けに来たのだね。」ときれいな英語で答えながら、胸で十字架をきった。彼は意外にも他の外国語も話せる教養ある人だった。その彼がどうしてホームレスになったのかはわからない。「サンドイッチよりも仕事が好き。」と働くのおおほつかない年配のホームレスが言った。社会と人々と繋がっていたいと彼らは切に訴える。雨が雪に変った夜のような夕方、クリスマスマーケットで華やぐ旧市街。普通のサンドイッチがクリスマスプレゼントで、彼を探し出した私が聖人だと言う彼。巨大なツリーを眩しそうに笑顔で見ながら、指の無い汚れた手でサンドイッチを食べるホームレスの人々の姿に涙が溢れた。

初めてホームレスの彼らと深く接した私は、厳しい環境の中でも助け合う姿勢を学んだ。そして、大事な事は物質的支援だけでは無く、彼らのひとりひとりとちゃんと向き合う事

だと気づいた。彼らが辛いのは、空腹や寒さよりも社会や人々から忘れ去られる事だった。

私は国を超え人種を超えて、どんな立場のどんな状態のひとでも、排除せず受け入れてサポートする世界を目指したい。ひとりひとりが皆価値あるものとして輝ける様に。高校生の私のできる事や挑戦は小さい。しかし、小さな挑戦から始まる大きな気づきを私は大切にした。ホームレスの彼が私に挑戦するきっかけと気づきをくれた様に。

私が遠い外国でホームレスの彼に会い助けられた様に、ひとは助け助けられて生きていく。助け合い共に繋がる世界を作ろう。無関心から関心へ。ひとを傷つけるのもひとだが、ひとを助けるのもひとしかいないのだから。私の小さな助け合いの挑戦はこれからも続く。